

●巻頭インタビュー

過去の成功体験を 捨て開発を続ける

岡田 民雄氏

(日本ルツボ株式会社相談役)

1937年6月25日生れ、満80才。千葉県富里市出身。慶応義塾大学文学部を卒業の後、1960年4月に日本坩堝（現日本ルツボ）に入社。国内営業、海外営業担当。昭和の終りに、実兄が経営する久能カントリー倶楽部に転身。取締役営業部長、総支配人を経て、1995年に日本坩堝に復帰。2月に専務取締役、6月に代表取締役副社長、その翌年2月に代表取締役社長に就任。2009年6月に代表取締役会長、2012年6月取締役会長、そして2017年6月、会長を退任し相談役に就任。以上が岡田民雄氏前会長の略歴。

6月12日、渋谷区恵比寿の本社に岡田民雄会長を訪ね「最後のインタビュー」を試みたが、開口一番、「ここからの開発では、成功体験を捨てないといけない。こだわれば、進歩が止まります。悩ましいところです（笑）」だった。以下、「ブラボーインタビュー」を簡潔に紹介する。——健康状態良好、開発意欲十分と感じました。まだやれると思いますので無理に退任されなくとも。

「早くから、80才になれば第一線を退くと決めていましたので。」

——会長の発案により商品化された案件が数多くありますが、なかでも、「メルキーパー」、「ゼブラックス」、「メルキャスト」が「3大開発品」と私共は受け止めております。

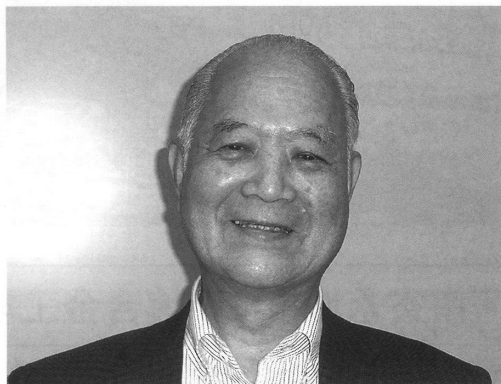
「ルツボ不要の連続溶解保持炉がダイカスト業界で普及しはじめ、何んとかルツボの衰退をくい止めたい。その危機感が、ルツボを2つ連結させ連続溶解するという発想につながりました。」

——「メルキーパー」の最大の特長は、やはり溶解歩留りの良さでしょうか。

「1に省エネ、2に高歩留り、3に高品質と言っております。これらはルツボを使つての間接加熱、低温溶解によるものでメタルロスが1%以下です。」

——土日が休業で1日8時間操業の工場に便利であるのはどんな理由なのですか。

「立ち上り時間が短いため非稼働の時には完全に火を止めてしまうことが可能だからです。一般の炉は非稼働の



時でも火を落とすことはできないでしょう。」

——タテ溝の入った黒鉛ルツボ「ゼブラックス」も好評のようですね。

「通常の黒鉛ルツボに比べ受熱面積を30%アップさせています。それにより6~10%の熱効率アップが図れます。お陰様でアルミ用のルツボの生産量では約30%になりました。」

——このネーミングも会長ですか。

「当社は長年にわたり（フェニックス）のブランドで黒鉛ルツボを販売しております。それに縞馬のゼブラを結びつけて名付けました。」

——次のメルキャストも会長が名付けられたのですか。

「メルキーパーはMelting and Keeping から付けた名前でしたが、この炉はMelting and Casting からメルキャストと、これも私が名付けました。」

——どんな特長があるのですか。

「これはルツボを使用しないと出来ない炉なのです。バーナーを着脱にしまして、主にアルミなのですが溶解・処理まではバーナーは炉に着いていて砂型などへの注湯時にはバーナーを炉から切り離し取鍋として鑄造します。溶解炉で溶解し取鍋に溶湯を移して鑄造するのと比べ溶湯温度が下がらないので先ず溶解温度が下げられるので大幅な省エネになり酸化ロスも少なくなります。溶湯の攪拌もなく、ガス吸収がないので鑄物の品質も向上します。」

——会長退任後の開発活動については…。

「健康が許す限り続けるつもりです。ただ、これからは、過去の成功体験を捨てないといけないと思っています。むずかしいんですが、今でも（クイックメルター）と言う炉も考えています（笑）。」

——つい、最近、ライセンス契約された「無酸化炉 freedom」については。

「非常に興味をもっています。」